

「幼稚園真諦」を読む その二

—「幼稚園教育の在り方」と対応させて—

津 守 真

二 幼児の生活

倉橋惣三の「幼稚園真諦」第一篇幼稚園保育法二、「幼児生活と幼稚園生活形態」で、幼稚園の生活が、できるだけ幼児の本来の生活に合致するようにということが強調され、次のように述べられます。

「幼稚園生活形態が幼児にとって、少しも無理はなからうかと心配していくとき、その無理は一切何に對してのことかと申しますと、それは、幼児の能力に對して、無理があると

か無いとかいう問題を言っているではありません。子供の能力に不相当な教育をする。そんな無茶なことは苟も教育といわれるものにあろう筈はないのです」

「むつかしいことを教えないようにせよと、そんなことを申すのではない。易いことを教えても、生活形態に無理があつてはならぬのです。……しかも、今日までの幼稚園保育法の研究は、子供の能力に属する方面や、その教え方のこまかい点において多く行われ、肝心の幼稚園生活については、行われていなかった観があります。これを要するに、幼稚園の真諦は、何を保育の目的とするか、如何に能力に相当させるかということを考えるだけでなくして、如何なる生活形態に幼児を生活させるのが、幼稚園の真の姿、実体であるうかということではなければならぬのであります」

幼稚園で、幼児に無理なことをさせないようになるとき、幼児の能力に対して無理がないように保育内容や教材を選ぶということではないと倉橋は明言します。彼の考えはもっと根本的な点をつきます。幼児の生活の全体にとって無理がないように、つまり、生活形態をよく考えるようにと云います。幼児にはおとなとは違った生活の仕方があるのだから、おとなの生活様式を子どもに移すのではなく、幼児の生活があるがままに尊重し、幼児として十分に生活できるようにおとなが考えるところに、幼稚園の土台が作られるのです。

幼稚園の枠を最初にきめておいて、その中に子どもをはめようとするのでは、何だか変だ、と倉橋は云います。朝、子どもが登園してきたその時から幼稚園は始まっているのであ

って、皆を集めて挨拶をするところから始まるのではないのです。見学者が、いつ保育がはじまるのですかと問うのは、おとな中心の考え方をもっていることを示しています。幼稚園の生活は、もっと、幼児の自然の生活形態のまままでできないものか。子どもが真に、そのさながらで生きて動いている生活を幼稚園の中に実証できないものかを倉橋は問います。そのような生活は、幼児においては遊びです。幼児らしく遊んでいるところに、幼児の眞の生活があり、幼児教育はそこをぬきにして考えられません。幼児が十分に遊べるように心を砕くのは、実に具体的で、実際的なことであります。

そしてまた、発達心理学や保育研究が、個々の能力の発達や効果的な指導法については詳細で厳密な科学的研究を行いながら、幼児の生活そのものについての研究は現在もなお極めて少いことは、「幼稚園真諦」が書かれた当時とかわりません。

「幼稚園真諦」を補うものとして、倉橋惣三「学校教育法における幼稚園」（幼児の教育第四十六巻第五号 昭和二十二年）を合わせて読みます。その中で、教育基本法第二条（教育の方針）について、とくに「實際生活に即し」ということについて次のように解説がなされています。

『第二条 教育の目的は、あらゆる機会、あらゆる場所において実現せられなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、實際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければなら

らない』

『幼児に於て實際生活とは遊んでいることである。……』

自由遊戯は、大人がこれを見る時、ロマンチックであり、ふうわりとしたものである。しかし幼児自らにとっては実にリアルなのである』と。

倉橋惣三は、子どもが遊ぶ幼稚園を、徹底して主張したために、童心主義者、ロマンチストであり、現実から遊離していると批判された時期がありました。倉橋は、おとなの目の中にはロマンチックな見方があることを承認しています。しかし、幼児自身にとっては、遊びはおとなの見るようにロマンチックなものではなく、真剣に生きる姿そのものではないか、おとなの側から云えばロマンチック、幼児の側から云えば現実的リアリティであるといえます。現実には、実際に生きていくことにおいては、子どももおとなも同じで、生きることの表現が違っていると云いかえても良いでしょう。おとなには、自分の表現の仕方がすべてだという自己中心が根深くあるので、子どもの独自の表現の仕方——遊び——を認めることができないのだと思います。

子どもの遊びは、実際に私共の身近にあります。

『若し先生が、『砂で汚れた手を洗い實際生活を離れて、教育の中にお入りなさい』と言ったとする。すると幼児は、こう云うであろう。『私は先生の教育のあいだは空虚なのよ。先生が云うとおりにしていれば、筋肉は発達し、技能は進歩し、知識はつくけれども、それは私の實際生活ではありません』と。それに対して、遊んでいる時、幼児は彼等として

の實際生活に充実しているので、幼稚園としては、そこに即してゆかなければならない」
私は、かつて、倉橋惣三は保育の實踐をしたことがないから、その観点からは彼の論には不十分な点があるのではないかと考えたことがありました。しかし、このような文章によむと、彼は実に保育の實際をよく知っていたと私には思えます。むしろ、保育の實踐にたずさわっている人が、子どもの實際をよく見ていないことがあることに、しばしば気付かされます。それは實踐の人が自分中心の考えになっているときです。自分の都合、計画、知識、理論で子どもを動かそうとしているときです。實踐者は、ともすると自分中心になろうとする自らの傾向に抵抗して、他者である子どものあるがままを認めて一緒に生きようとはじめるとき、子どもの實際の姿を見ることができるようになります。

倉橋惣三は、日日の保育者としては保育の實踐にたずさわらなかつたでしょう。けれども、子どもの實踐に即して保育をしようと努めていた保育者たちの中に園長として交つて、想像力をもってその人たちの立場に身をおこうとしていたのだと思います。園長もまた、管理者として自己中心になる傾向を自らの中にもっています。それを破ろうとする努力の中で、保育者と子どもとの間のことを理解してゆくことができたのでしょう。このことは同時に、倉橋がこれを書いたころのその幼稚園の保育實踐者たちが、日日のこのような自分自身との戦いの中で保育していたことを示すものであると思います。

「幼稚園教育の在り方について」の中で、幼児の生活に対応するのは、IV改善の視点、1

(4)です。前にも述べたように、これは昭和六十一年の文部省の報告書で、四、五十年も前に書かれた倉橋惣三の著書と直接の関係はありません。ただ、いずれも、幼児教育の本質を問うことにおいて共通するものがあるはずだという点でのつながりにほかなりません。

「1(4) 幼稚園教育は遊びを通しての総合的な指導によって行われるものであること、

幼児の生活の中心は遊びである。この時期の遊びは、幼児が、大人や友達とのかかわりの中で、意欲的・主体的に興味や関心をもち、身体を働かせて周囲の環境や文化にかかわり、活動を創造し、展開するはたらきの全体と行うことができる。……幼稚園における指導の中心は、このような遊びにあるのであり、その中には幼児が人間として発達していくのに必要なものが混然一体となつて含まれている。その意味で、遊びは一定の系統的観点から分析しつくせないものであり、その望ましい指導は必然的に総合的かつ柔軟なものとなる」

ここでも、遊びを幼児の生活の特質としてとらえています。ひところ、遊びは学習に役立つ範囲で価値があるというような論がいわれた時がありました。私はこれは幼児を實際に即して認識していない浅薄な論だと思えます。遊びは、幼児が幼児らしく生きる仕方であつて、幼児期そのものと切り離すことができません。幼児は遊ぶ存在です。その観点から云つても、「幼稚園教育の在り方」のこの一節は重要な部分であると思えます。

三 保育者の生活——教師の役割

幼稚園は、幼児の生活だけがあって成り立つものではありません。幼児が幼児の生活をすることができるよう、保育者が支えていなくてはなりません。そこで、保育者がどのように生活するか、教師の役割をどのように認識するかは、幼稚園の性格をきめるのに重要となります。

「幼稚園真諦」の第一篇、四、「幼児生活の自己充実」には、次のように述べられます。

「幼児の生活それ自身の自己充実に信頼して、それを出来るだけ發揮させて行くということに、保育法の第一段を置くとして、それには幼稚園として適当な設備を必要要件とします。この意味に於て、幼稚園とは幼児の生活が、その自己充実力を充分發揮し得る設備と、それに必要な自己の生活活動のできる場所であると、こういいています」

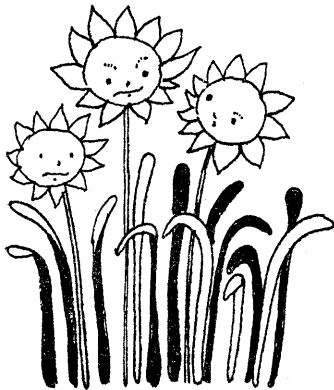
「その設備の背後には、先生の心が隠れて居る訳です。ですから設備とだけいっても、その設備の心の中に、先生の教育目的が大いに這入って居るのであります」

ここで、保育者を環境の重要な部分として述べています。それほどに、保育するおとなは幼児の生活を支えるものとして位置づけています。さらに「幼稚園真諦」五、「幼児生活の充実指導」には、教育者の働きについて、次のように述べられます。

「目的へ向っての指導という意味を強く考えますならば、こちら、すなわち先生方へ引きつけて居ることになります。幼稚園の先生方の中には……はっきりなしに子供に向って働

きかける先生(があります)。たえず苛々しながら働きかけるのです。いらいらとは、自分の心を本体として向うに要求する、非系統的断片的不満感情であります。……その苛々している先生は、自分の目的を以て子供の生活に臨んで行く力が、強過ぎていることにもなりましょう」

私共もしばしば体験する「いらいら」という感情がどこからくるかがよく説明されていません。それは「自分の心を本体として向うに要求する」自分中心が根本だと云います。目的や目標は良いものだったとしても、相手に対する配慮なしに、目的や目標を押し出すときには教師の自分中心になります。これを倉橋は「非系統的断片的不満感情」と云います。具体的にせよ、抽象的にせよ、相手に対する期待水準が最初からきままっているのですから、相手がそれに沿ってこななければ、当然不満感情が起ります。「自分の要求を以て相



手を見て、思う様にならないとき、そういう感情が残るのも、こっちからいえば説明のつくことでありまして、熱心であればこそ、そういう感じも起る訳なのでありますが、之を系統づけていけば、深みのあるしつとりとしたものになるのを、非系統的に断片的に出してくると、この苛々になるのです」と倉橋は分析します。

倉橋の「学校教育法における幼稚園」論において、第七十八条（幼稚園の目的）「幼稚園は幼児を保育し、適当な環境を与え、その心身の発達を助長することを目的とする」ことが論じられ、とくに「幼児を保育し」ということがとり上げられています。何故「幼児を保育し」と云って、「幼児を教育し」といわないのか。

「結論としてこう云える。幼稚園の目的が教育にあるというのは、仮に相手は幼児である事を考えず、これも亦人間であるという事だけで考えた場合であると思う。皆さんはあの幼児を抱いて、実に人間であると思うであろう。幼児が三歳の子、四歳の子たる事を忘れるのではないが、人間として抱いている時、皆さんは幼児を教育する事を考える、しかし、実に三歳である。四歳であるという事に心が注がれた時に、保育してやらねばならぬと考えるであろう」

保育というときには、具体的に相手があつて、その人との応答関係があります。しかもそれは、相手が自分の判断で自身の生活を作ってゆくのを支えるような応答です。だから、単に外的な行動に対して反応したり刺激を与えるだけではすまない。内面に対して応

答するのには、こちら内面の部分で受けてゆくことになりますから、こまやかな配慮と
なつてゆきます。こうして、子どもたちの中にあつて、さまざま子どもと応答してゆく
のが保育者の生活です。

幼児の指導は、「外部の標準による指導でなく、相手の内部指導でありますから、子供
の中に入つてないと出来ません」と「幼稚園真諦」第一篇 五「幼児生活の充実指導」で
述べます。

「幼稚園教育の在り方」の中で、この点はIV改善の視点1(2)に対応します。

「(2) 幼稚園教育は環境による教育であること、幼稚園教育の目標が有効に達成されるた
めには、幼児が、自発的・主体的にかかわれるような環境の構成が最も大切である。その
環境には、人的・物的の両要素が含まれていること及びその核をなす教師の役割につい
て、教師の十分な理解が求められる。この場合、教師の果たすべき役割の基本は、幼児と
生活をともにし、幼児との信頼関係を十分に築いて幼児の心に触れ、その発達や興味・関
心の芽生えを発見し、それを育てることによつて、幼児の心身の発達を適切に助長するこ
とだということができる……」

ここで、環境には、人的環境と物的環境の両方があるとされ、その核をなすのは教師で
ある人間と考えられています。物的環境は、教師にとっては最初から与えられている部分
が大きいわけですが、教師の使い方によつて、子どもにとっての物的環境の意味は変化し

ます。環境は人が変容してゆくものです。

更に、教師の果たすべき役割の基本が、明瞭に述べられています。その第一は、幼児と生活を共にすることです。幼稚園においては、教師は、子どもから離れたところに立つのではなくありません。朝、子どもが登園したときから、帰るまで、生活を共にすることが前提となります。その教師の「私」が子どもと一緒に、一日を歩む人となる時、子どもにとってすべての環境が生きて輝いてきます。

第二には、信頼関係を十分に築いて幼児の心に触れることです。子どもと身体的に一緒に場にいるからと云って、心に触れているとは云えません。私の心が子どもの心に触れるのには、私はどうあつたらよいのか、また、どうしたらよいのでしょうか。大きな課題です。

第三には、その発達や興味・関心の芽生えを発見し、それを育てることです。幼児においては、発見されるのは芽生えです。それがどのように花を開いてゆくかは、まだわかりません。先を急ぎすぎ、形を期待しすぎると、芽の段階で枯らしてしまいます。育てるのは周囲のおとなの日日の労苦ですが、育つてゆくのは芽自身です。

こうして、幼児の心身の発達を助長するのが幼稚園教育です。「助長する」というのは、再び倉橋の「学校教育法における幼稚園」によれば、「受身的アクティヴ」「パッシヴァリティーヴ」です。

「幼稚園教育のむつかしさもこのこつにある。こんなにアクティヴなものを、こんな

にもパッシヴに表現しなければならないのである。あらわに子供に働きかけていないでしかも働きかけているのである」と倉橋は述べています。

私は、受動性と能動性は、保育行為の両面だと思っています。保育においてはとくに、子どもの心や行為を受ける側面は重要です。おとなが、受ける側面をはたらかすことなく、能動の面だけを出したら保育にはならないと思います。そして、子どもの自発的・自主的、創造的行為に興味を見出すとき、おとなの行為は一見受身に見えても、実に大きな規模の能動性を発揮しています。

保育者の生活及び教師の役割をこのように認識するならば、幼稚園は幼児が生活する場となってゆきます。

(つづく)

(愛育養護学校)